聖　書：ヨハネ 3：16〜21
説教題：光が世に来ている
日　時：2023 年 12 月 24 日（朝拝）

ヨハネの福音書 3 章 16 節は聖書の中で最も有名なみことばかもしれません。しばしば「聖書の中の聖書」と言われます。それほど聖書の福音のメッセージが凝縮して語られている言葉と言えます。またここは神が御子イエス様を世に送ってくださった出来事について語っていますから、クリスマスの時に読むのにふさわしい御言葉とも言えます。改めてこのヨハネ 3 章 16 節を味わいつつ、ともすると一緒に読まれないことも多い、続く 17〜21 節も一緒に見て行きたいと思います。

まず 16 節が語っているのは神の愛についてです。注目すべきは神は何を愛されたかということです。ここに神は「世」を愛されたとあります。この「世」とはどういう意味でしょうか。この世界ということでしょうか。強調点はどこにあるのでしょう。この世界全体ということでしょうか。神の愛の対象が広いということでしょうか。しかしここはそのように量的に理解するよりも、質的に理解すべきであると、有名な聖書学者たち（ウォーフィールド等）は言っています。聖書の中で「世」という言葉は、神から離れ、神に逆らって立つこの世界のあり方全体を指して使われることが良くあります。このヨハネの福音書でも、たとえば 15 章 18 節でイエス様がこう言われた言葉があります。「世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。」　ここで世は、神またはキリストに敵対するこの世界の思想やシステムの全体を指しています。そのことを考慮すると、今日見ているみことばは驚くべきことを語っていることが分かって来ます。すなわち「神が世を愛された」とは、「神がご自身に逆らって立つ者たちを愛された」ということになります。聖なるご自身とは性質が全く反対の、今やご自身に敵対し、反抗する、罪深い者たちを愛された。これは私たちが誰かを、あるいは何かを愛するという時の愛とは全く異なります。私たちの愛は通常、相手の側がどうであるかに依存しています。相手に魅力がある時、私たちはそれを愛します。相手の側に自分を引き付ける価値がある限り、私たちは愛します。ですから相手に魅力を感じなくなると私たちの愛は消えるのです。そしてそれは相手が悪い、相手が変わったからと言うのです。しかし神がこの世を愛したのは、この世が魅力的だったからではありません。むしろこの世は罪に汚れており、その上、神を認めず、神に逆らっているにもかかわらず、神はそんな世を愛されたとこの御言

葉は語っています。ですから神の愛は相手に依存していないということです。むしろ神はご自身が愛そのものであるお方として（ヨハネの手紙第一 4 章 8 節：「神は愛だからです」)、ご自身から出る一方的な愛によって、この世を愛したと言われているのです。

では神はどれほどの愛で世を愛されたのでしょうか。16 節で二つ目に注目するのは、「その一人子をお与えになったほどに」という部分です。「一人子」という言葉には独特のイメージがあります。もちろん子どもは複数与えられても、みな親にとっては特別でかけがえのない存在です。しかし一人子にはまた違った響きがあります。その子を失ったら、その家には子がいなくなってしまいます。しかしここで言われているのは神の一人子です。人間の場合、一人子は特別と言っても自分の人生の途中からともに過ごすようになった存在に過ぎません。自分が生まれてから 20 年も 30 年も後から一緒に歩むようになった人。そしてその後、一緒に過ごすのも数十年程度でしょう。しかし神にとっての一人子イエス様は永遠の昔からともにおられる方です。イエス様はある個所で「わたしと父は一つです」と言われました。人間の親子関係では説明不可能なような深い一致の関係の中にあります。この福音書の 1 章 18 節ではイエス様を指して「父のふところにおられるひとり子の神」と言われています。永遠の昔からずっと父のふところにいると言われるような関係にある方です。そのようなかけがえのない最高のものを神は与えてくださったのです。ご自身が持っているベストのものを、何とこの世に与えた。神に逆らって立つ者たちにです。何とめまいのするようなことが言われていることでしょうか！私たちにとってこれは信じられることでしょうか！しかもその方を「お与えになった」とあります。これはこのクリスマスの時、世に送ってくださったことも含みますが、それだけではありません。この「与えた」という言葉に含まれているもっと深い意味は十字架に渡すために与えたということです。私たちの身代わりとしての死を遂げるためにということです。これを誰が理解できるでしょうか。どの親が自分の一人子をそのようにささげることができるでしょうか。しかも敵対する相手に。しかし神は永遠の昔から愛している最愛の一人子を、この世を愛して、その救いのために、十字架にまで渡してくださったというのです。私たちはこのような愛について聞いたことがあるでしょうか。また考えたことがあるでしょうか。そして自分がそのように神に愛されているということを知っているでしょうか。このクリスマスの時、私たちはこの神の愛を思い巡らし、神に礼拝をささげたいのです。

16 節で注目したい 3 つ目のことは、この神の愛のみわざの目的です。それは「御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」ということです。神がこのクリスマスの時、イエス様を送り、私たちの代わりに十字架につけてくださったのは、本来私たちが支払わなければならない罪の負債がイエス様によって十字架上で支払われ、それによって私たちの罪が赦され、永遠のいのちに生かされるためでした。しかしそれは「御子を信じる者が」とここで言われています。つまり信仰がここで求められています。良い行いはいりませんが、――その前提として私たちは神に良いと認められる良い行いはできないのですが――ただ信じることのみを神は求めています。これは言い換えれば神は無理矢理に救うことをしないということです。その人の意志を無視して、その人の意志に関係なく、力ずくで救うということはしない。救いはただですが、私たちが感謝して、信仰という名の手を伸ばして受け取ることだけを神は求めておられます。そうする人は一人も滅びることなく、永遠のいのちを受けるとあります。これが聖書全巻に渡って一貫して述べられている救いの方法です。

では私たちはどうなのか、私はどうするのかというのが次の問いとなります。17 節に「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである」とあります。神は世を救うために大切な御子を送ってくださいました。しかしこの救いを受け取る方法は信仰を通してであることを今見ました。ということは全員が救われるわけではないということになります。神は世を救おうとしていますが、人間の応答によってこの世の人間は二つに分かれることになります。18 節にある通り、それは御子を信じる者と御子を信じない者です。第三の立場はありません。

まず「御子を信じる者はさばかれない」とあります。イエス様のあの十字架は私の罪の身代わりとして神が行ってくださったことだと信じる人は罪を赦され、さばかれません。その一方、「信じない者はすでにさばかれている」と続きます。イエス様を信じない人は「世の終わりに」さばかれるでしょうか。聖書は多くの箇所でそうだと言っています。その人は自分の罪が残ったままの状態なので最後の日にその罪について問われ、さばきを受けることになります。しかしこの 18 節が言っているのは「すでにさばかれている」ということです。それは「神のひとり子の名を信じなかったから

である」と改めて重大な言い方がされています。その人は神の一人子の名を信じなかった。神がご自身の一人子まで与えて救おうとされた御心をわきまえず、それを軽くあしらうことは小さな罪では済まないということです。その人はすでにさばきの中に、そのプロセスの中にあると言われています。ちなみにここの「信じない者」とは「信じようとしない人」のことです。まだ福音やキリスト教のことを知らないために信じていない人ではありません。その人は福音を聞いて信じれば良いのです。ここで考えられている「信じない者」とは、キリスト教の福音を示されて、ある程度知っているのに信じようとしない人、信じないという路線を取り続けている人です。その人はやがての日にさばかれるだけではなく、今すでにさばかれている状態にあると言われているのです。

19～20 節にこう説明されます。「そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。」　世に来ている光とはイエス様のことです。イエス様は光なる神を説き明かした方、神を知る本当の光をもたらした方。その神を知り、神と正しい関係に立つ時、私たちは神の光の中を歩む者たちとされます。この光は神から来るあらゆる祝福も象徴します。ところで皆さんは光がある方が良いでしょうか。ない方が良いでしょうか。普通は光がある方が良いと答えると思います。暗い中で光があると助かります。周りが良く見えるようになります。光がある時、私たちは安心しますし、光は希望の象徴でもあります。しかし光は良いことばかりをもたらすかと言えば、私たちにとっては必ずしもそうではありません。それまでよく見えなかったものが見えて来ることによって私たちにとって都合が悪いということも生じ得ます。たとえば私たちも暗い中にいれば、自分がどんな状態にあろうとさして気になりません。髪がぼさぼさであろうと、どんな服を着ていようと気になりません。しかし明るい照明の下に行くとどうなるでしょう。突然自分の現状がさらけ出されます。それまで気にしていなかった顔のしわやほくろがくっきり見えて来ます。あら、私、こんな顔だったかしらと驚き、ショックさえ覚えるということが起こります。また着ていた服の汚れや染みがはっきり分かります。そのため、急いでそこから離れてもっと暗い場所へ行きたいという気持ちにもさせられます。

具体的な例として考えやすいのは聖書に出て来るパリサイ人や律法学者といった当時の宗教指導者たちのことです。彼らは宗教に熱心で道徳的な人たちとして、一般

民衆から高く評価され、尊敬されていました。しかしイエス様が来た時、どうなったでしょうか。光であるイエス様の言葉と生き方の前で彼らの義は安っぽいものに見え始めました。立派に見えたのは外側だけで内側は全然そうでないことが明らかにされました。一言で言えば彼らの偽善があぶり出されました。それまでは良く見えなかった彼らの醜さがまことの光のもとで暴露されることとなりました。それで彼らはどうしたでしょう。彼らはイエス様を邪魔だと考えたのです。明るい光は都合が悪い。あの光を消さなければならない。そうでないと自分たちの醜さが益々顕わになって耐え切れない。そこで彼らはイエス様を殺そうとしました。実際イエス様を十字架につけた第一の責任者は彼らでした。彼らは光よりも闇を愛したのです。私たちも同じです。私たちもイエス様の言葉あるいは聖書の言葉の光に照らされると、それまでよく見えなかった私たちの嫌な面、醜い面がチラッ、チラッと見えて来ます。あなたは罪人だよ！と聖書の光はチクリチクリと指摘して来ます。その時、私たちはどうするでしょう。一つの応答は聞きたくないから、それ以上聞かないということです。耳と心を閉じる。これはつまり暗闇へ逃げるということです。私たちはその時、こう思うのです。そんなに明るい光の中にいなくても良い。そこはあまり居心地が良くない。明るさは程々で良い。そうして暗闇の方向へと戻って行くのです。なぜそうするのでしょうか。それは自分を変えたくないからです。自分を変えるなんてことは自分のプライドが許さないのです。でも光に照らされて自分の行いの本当のところがさらけ出されるのは嫌。それは恥ずかしいと思うのです。それならまだ暗闇の方がいいと考えて闇の方へ戻って行く。光よりも闇を愛する。ここにおいてすでにさばかれている！と聖書は言っているのです。益々光から距離を取り、暗闇へと逃げて行く。そうしてそこに自分をいわば閉じ込める。そこに安住しようとする。そのことにおいて実はさばきのただ中にあると言われているのです。

もちろんこの状態で終わりとなることはありません。最後に闇は決定的にさばかれることになります。暗闇を好んで安住しようとするその先には最終的なさばきが待ち構えています。そういう場所に自分で自分を閉じ込めることになります。だからこのことをよく考えて、その道を行かないように！とヨハネは語っているわけです。光なるイエス様を退けることによって最後のさばきへと至るプロセスの中に自分を追いやり、閉じ込めてしまうことがないように！と。

一方、最後の 21 節で御子を信じる人について真理を行う者と言い換えられ、その

人は「光の方に来る」と言われています。それはその人が立派だからではありません。その人は光に照らされて自分の罪を認め、そんな自分のために御子の十字架があったことを受け止め、信じます。その人は先に見た通り、罪の赦しを受け、さばかれることはありません。しかしそれだけではないのです。その人は真理を行う者、神の真理にかなう良い行いをする者へと導かれます。その行いは神にあってなされます。その人は罪を赦されるだけではなく、神から来る新しい力と命に生きる者とされるのです。今日の箇所の直前で言われているのですが、新しく誕生する者となります。地上にある間、不完全なところは多く残りますが、それでも神と結ばれたことによって新しい歩みができる者とされるのです。神に喜ばれる正しい歩みができる者へと変えられて行くのです。その人はもはや光を避けたり、そこから逃げようとはせず、むしろ光なる神に向かって益々歩むように導かれます。そしてその生き方をもって神に栄光を帰すのです。そういう祝福へと神は御子を信じる者たちを生かしてくださるのです。

神はこのクリスマスの時、この世を愛してご自身の尊い一人子を与えてくださいました。光はすでに世に来ています。この光の前で私たちの前にあるのは二つの歩みのみです。私たちは自分を保つため、本当の姿がさらけ出されることを嫌い、光よりも闇を愛する歩みをする者でしょうか。そうして自分を益々やがてのさばきに向かって、そこに閉じ込める歩みをする者でしょうか。それとも光に照らされて痛いと感じても、神が御子の十字架を通してその傷を回復させてくださることを知り、益々神の光の中で変えられて行く人生へと進む者でしょうか。神が御子を世に遣わしたのは、御子によって世が救われるためです。この御心を受け止めて、神がこの時、私たちに与えてくださった本当のクリスマスプレゼントを両手を出して受け取り、光の中を歩む者へと導かれたいと思います。そして神から来る新しい力によって神の御心にかなう正しい歩みをする者へと少しずつ造り変えられ、やがて完全な光である神とともに天の御国で永遠に生きることを楽しみに待つ幸いな歩みへ導かれて行く者たちでありたいと願います。